いわみざわの民話

第4回

いわみざわの民話は、平成9年に「いわみざわの民話」刊行委員会が発行しました。

渡し場物語②

こうした一種の無法地帯には、かならずそれなりの用心棒が居つくものであった。そのころ名の知れた用心棒といえば、目玉の松ちゃん、般若の松とかいったヤクザであったが、これらはそれほど大した大物ではなく、いまも住民の中に忘れられぬひととして、藤五郎あにいというのがいた。藤五郎は役者のようないい男で、きっぷもよく、その上若いのに似合わず貫禄があったといわれている。藤五郎はバクチもしたし、ひとを泣かせるような悪さもしたが、頼まれればいやといわず、殊に女や子どもには人気があった。藤五郎の男らしさが好かれたのだろう。

この宿場には、いつも何かのいざこざがあった。さきにもいったが、駐在所の巡査などでかたづくものではなかった。そんなとき、藤五郎が起用された。藤五郎が出てゆくと、それはかんたんにおさまった。泣く子もだまるというこわさである。

藤五郎の家の近くの料理屋には、藤五郎もときどきあがった。そこには女がいた。そうした女の中には、宿命を背負った若い子もいたらしい。どうしたことか、藤五郎はオシズにひかれた。おたがい熱い仲になってしまった。しかし藤五郎には女房がいた。男らしい藤五郎には分別があった。きっぱりと別れることにした。藤五郎は料理屋の主人にだまってカネを渡した。オシズを他国にやることにしたのだった。

藤五郎は、オシズには旅人の連れをつかせ、知り合いへの手紙をもたせ、旅費も与えて、こっそり夜の川を渡らせた。夕張へやることだった。

上幌橋を渡ると、橋のたもとに、ちょっとした大石がある。ひっそりと送られたオシズは、その大石の上にのびあがって、何度も藤五郎に無言のお辞儀をしたという。それが藤五郎の目には、ほのかに映ったということである。

《完》

第5回は「雨読橋物語」を紹介します。

発行・編集　岩見沢市総務部市民活動課

ひとの動き　平成22年5月31日現在

●住民基本台帳	人　口	総数 90,498人（前月比 −94）
		男 42,544人（前月比 −43）
		女 47,954人（前月比 −51）
	世帯数	42,386世帯（前月比 ＋2）

岩見沢市役所
〒068-8686 北海道岩見沢市鳩が丘1丁目1番1号
☎0126-23-4111　FAX 0126-23-9977
ホームページ　http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp
▶救急当番医ガイド　☎0126-23-5153
▶消防テレホンガイド　☎0126-24-0119

この広報紙は道産間伐材配合紙を使用しています。

広報紙は綴じておきましょう